

構造計算書偽造問題を考える

はじめに

今月は、最近マスコミをにぎわしている構造計算書の偽装問題を取り上げてみたいと思います。なお、記載している事件の概要等は、すべて新聞、雑誌等に掲載されたもののみがソースであり、意見にわたる部分は私見であることをあらかじめお断りしておきます。

1. 事実関係

構造計算書偽造問題に関する登場人物、位置付け、役割をまとめると、以下のようになるかと思えます。



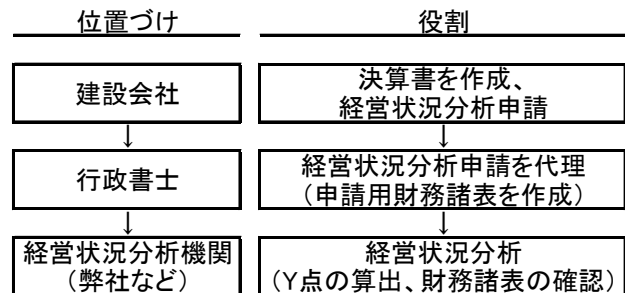
問題の直接の当事者は、耐震強度を偽装した構造計算書を作成した姉齒建築士です。この点については、姉齒建築士本人が、偽造を認める発言をしていることから、第一義的に責任を問われるのが姉齒建築士であることは、ゆるぎない事実でしょう。

しかし、問題はそれだけにとどまりません。① 建築主または建設会社が、姉齒氏に構造計算書の偽造を強要した疑いがもたれていること、また、② 指定確認機関であるイーホームズが構造計算書の偽造を見抜けなかったこと、なども問題視されています。

2. 経営状況分析

この事件の報道を目にして、私が感じたのは、事件の登場人物の位置付けが、経営状況分析の仕組みと酷似しているということでした。

経営状況分析の位置付けと役割を図示すると以下ようになります。



似たような関係は、ほかにも思い当たります。昨年の秋に発覚した、西武鉄道の有価証券報告書偽造事件、今年の春に問題となったカネボウの粉飾事件です。これらの事件では、「チェック機関」にあたる、担当の公認会計士、監査法人が、事実を見逃した、あるいは、積極的に粉飾に加担した疑いがもたれました。さらに、海の向こう側では、『エンロン事件』という、粉飾を行っていたエンロン社が経営破綻するとともに、「チェック機関」であった、アーサーアンダーセンという世界最大の会計事務所のひとつ(従業員数は数万人といわれていました)が解散に追い込まれるという事件もありました。

3. 結語

これらの事件を目にして、私が申し上げたいことは以下のとおりです。

すなわち、① 経営状況分析の世界でも、今回と同様の問題が起こる可能性を否定できないこと、② 申請代理人である行政書士の皆様には、『申請のプロフェッショナル』として、財務諸表に関する十分な知識と虚偽申請の圧力に屈しない姿勢を保持していただきたいこと、③ 経営状況分析機関である弊社は、発見しうる虚偽の申請を決して見逃さない所存であることです。

経営状況分析制度の社会的信頼性は、行政書士の皆様と私ども経営状況分析機関に依存していると考えております。今後とも皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

(取締役 公認会計士・税理士 矢島和彦)